

# 伊藤外科ニュース



## 85号

2011. 6 発行



### 梅雨の訪れ

今年は、寒暖の差の激しい異常気象が続きます。先日は、日が照っているにもかかわらず、雨がパラパラと「狐の嫁入りの状態」でした。狐は人をだましたり、たぶらかしたりする動物と昔から俗説があったので、この様な表現が存在するのだと思いますが、狐には迷惑な話でしょうね。

さて、今年のゴールデンウィークには、私は沖縄に初めて行く予定にしていました。しかし、あの大地震の後で旅行に行く決心はつかず、関東近隣で過ごしました。特に前半は天気がよく森林浴を満喫しました。梅雨入り前のこの時期は木花が一斉に元気になり素敵な時期ですね。

我が家のテラスには、この時期見事なバラが一斉に咲き誇ります。このバラは、家内と約20年前デパートの屋上の園芸コーナーで買ったものです。2株の「赤いバラ」と書いてあった苗木を買ったのですが、なんと1株の枝からは黄色い花が咲きました。家内は当初困っていたようですが、黄色い花の香りが素晴らしく今では気に入っています。

沖縄では、すでに5月には梅雨入りし、今年の東京の梅雨入りも早くなるようです。梅雨の高温多湿が好きな方はまずいないでしょう。胃腸炎が増えるのもこの時期です。身体に気を付けてお過ごしください。



### 肝臓のはなし

さて、先月号では、健康診断の話題の第一弾として貧血の話をいたしました。今回は肝臓、肝機能検査について少し書いてみます。

健診でしばしば肝臓の検査異常を指摘される方がいらっしゃいます。飲み助の患者さんは、「検査の前の日にお酒を飲み過ぎたせいかなー。」と言われますが、まず問診と検査項目の異常パターンから、医師は様々な原因を考えていきます。

肝機能検査の異常の原因は実に多く、場合によっては甲状腺など他の病気が原因の事もあります。しかし、やはり検査異常の原因として多いのは、飲み過ぎ食べ過ぎ、摂取カロリーオーバーによる脂肪肝です。そこで、脂肪肝をよくする薬をくださいという患者さんに一言。「お薬はありません。暴飲暴食を控えてお腹をへこめましょう」

また、B型やC型肝炎やその結果生じる肝臓がんの見落としには要注意です。住民健診の際には、肝機能異常の方はこの肝炎検査(血液検査)を受けることができます。お酒を多く飲む方は、肝臓の異常を指摘されるとお酒のせいと考えてしまいがちですが、肝臓が傷む原因は多彩で複雑です。医師に相談し原因を診断し、対処法を考えましょう。

また、逆に血液検査で異常なしと判定されただまだ飲めると安心されている飲んべえさんへは、アドバイスを差し上げます。アルコールの障害はしばしば血液検査に出ないこと。検査異常が指摘された時は、相当重症である事と私の恩師は患者さんに話していました。



(院長)



## 今回の一冊

# 日本歴史を点検する

著者 海音寺潮五郎×司馬遼太郎

一昨年、確か古代史に関する大学の社会人講座を受けた時のこと。講師が話の合間に、ポロリと口にしたこの言葉が記憶に残った。「私たち皆、十代遡ると 512 人の先祖がいるんですよ」。どうということかという、自分の親が2人、祖父母が4人、曾祖父が8人……、こうして 10 代前まで遡ると、自分につながるその世代の先祖が 512 人というわけである(ちなみに、10 代前から親の代までの先祖の合計は 1022 人! )。

それじゃ、十代前の先祖が生きていた時代は? というわけで、検証してみた。今、ワタクシの手元には、三弓の生まれた当初の戸籍がある。なんとこれには三弓の曾々々祖父の代(つまり五代前。ワタクシにとっては六代前)までの記録がある。曾々々祖父の生年はわからないが、曾々々祖母は 1811(文化8)年生まれ。間宮林蔵が樺太を探索したちょっと後、彼のシーボルト事件より前の時代である。これを発見したとき、なんだか愉快的気分になって、笑っちゃいました。そこからあと四代、各代、23 歳で次世代が生まれたと過程して計算すると、ワタクシの十代前は 1742(寛保2)年生まれ。徳川将軍家の中興の祖にして、『暴れん坊将軍』のモデル、徳川吉宗(八代将軍)の時代である。

ほんの遊び心で、己に続く年表を作っただけで、「歴史」や「その時代」がただの記録ではなく、温度も湿度もあるもの感じられるのだから、実に不思議。

で、今回の一冊は、昭和を代表する歴史作家、海音寺潮五郎と司馬遼太郎の『日本歴史を検証する』(講談社文庫)である。ともにすでに故人となつて久しいが、昭和 44 年、「朝十時から夜の八時まで、途中一回の食事、一回の茶の時間があつただけで、お互い、飛雲に駕し、風に御し、碧落を翔けるような気持で、語り合い、話話し合い続けた」対談記録だ。

中心に語られるのは、幕末を生きた人びとの話だが、当然のごとく歴史を点では捕らえていないわけで、その内容は多岐に亘る。それにしても、なんていう知識量だろう。実体験のない「歴史」も、膨大な知識を持ち、それを己のなかで再構築していくことで、「知」というものに到達することができるのだなあ……、としみじみ。

海音寺氏は前書きで、こう書いている。「読史家にとって、話しごたえのある相手と歴史を談じ、史上の人物を評論するのは、確かにたいへん楽しいことです。話しごたえのある相手とは、よく史書に通じ、知識が豊富で、感性が敏感柔軟で、すぐれた見識のある人の意です。(中略)こんな人はなかなか得難いのですが、司馬遼太郎氏はこんな人です」。それぞれの生年を調べてみたら、海音寺氏が明治 34 年、司馬氏が大正 12 年生まれ。親子ほど年が離れている。対談当時、司馬氏は 46 歳。今、ワタクシの年齢は……。いやいや、比べるのもオコガマシイ。